

徳川時代大阪商人の商魂

——主として海保青陵の著書を通じて見たる——

有働研造

はしがき

大阪は今日、非常時政治の中樞である東京と並んで、非常時經濟の鍵を握り、非常時を憂ふる人々の注目を惹きしめないところである。此大阪の繁榮は決して夙忽として完成されたものではなかつた。維新後の歴史的變動が此地の繁榮に幸するものがあつたとはいへ、單に其事が大阪今日の繁榮を培つたものではなく、既に其以前の歴史的運命に大阪の繁榮を約束せしむべきものがあつたのである。そして更に、大阪の今日の爲に健闘之れ努めつゝある大阪人の精神的把握の中には、過去の歴史的活動の間にはぐくみそだてられた都市精神の傳統的賜物が、より彫琢精鍊されたものとして把持し續けられ來つ

てゐる。吾々は今夫れを商魂と呼ぼう。明治維新の成功が、嘗つては徳川時代の武士をして嗟嘆して言はしめたところの「町人の世の中」を、現實に日本のものとして齎した時、そして文明開化、自由民權、殖産興業と矢繼早に唱出されてくる歴史推進の掛聲が、人々の心を刺戟し、日本の資本主義化に拍車が加へられ、商工業振興の要望が世人の神經をかきたてた時、時代の此機運は歴史研究の部門の上にも其要望に副ふべき所産を生みいだしてきた。

全社會の聲として會て纏まるゝことのなかつた商業及商人に關する編纂が、今は重要な意味を帯びしめられて茲に登場を許されたのである。之等著作の目的が何であるかは、例へば明治二十六年刊、瀬川光行編、「商海

英傑傳」の語るに徴して明らかである如く、夫れによつて商工子弟を益し、進み行く日本商業の精神的薰陶の爲に教を垂れんとするにあつたのである。埋没されてゐた日本商工業の事情が闡明され、商工界の先達が脚光を浴びて賑々しく登場し、人々は之等に就いて自己の生活補強化の一つの方法を學び得たのである。乍然、之等の現象は、新時代の轉換が所詮は生み出すべきものを産んだ結末であり、社會が商工業を其主座に推し之に對する認識を新にせしめらるゝ時、當然來るべき現象であつた。

然るに夫れとは事變り、封建政治が其支配を誇り、士のみ獨り尊く、商工の賤視が一般的であつた徳川時代に、注意を都市民の生活に向け、其處から貴重な教訓を學びとらうとした海保青陵の用意は特筆さるべきものとされねばならぬ。「江戸に居て江戸者のすることをすれば、江戸者だけならば金はもふからぬ也、京に居ても京者のすることをすれば、京者だけならば金はまふからぬ也、京に居れば京者の外の智慧をだし、江戸に居れば江戸者の外の智慧を出さねば、京の拔群の金もふけ、江戸の拔

群の金もふけは出來ぬなり、京にもせよ、江戸にもせよ、昔より身上を仕出して一家を興したる人を見るに、皆存じもよらぬ事を工夫して大金をもふけたるもの也、扱其存じもよらぬ工夫は、何れより聞き出し見出したるといふに、唯其國其所に無きことにて、他國にはあることなり、其時分其ころには無きことなれども、昔にはなんほもあるなり、中略然れば他國のはなし昔の話を澤山に集めたる書きものを常々に見て其趣きを取りて、今の用に用ひらるるよりに修覆して、活してつかふがよき也。」^②此態度が青陵の大阪觀察にも其儘に適用され、大阪の生きた姿が彼の筆によつて描かれてくる。武士の經濟的關心が高まらざるをえない周圍の事情が、武士の利に對する觀念を刺戟してゐたにも拘らず、世祿の恩恵に偷安の日を樂しむ彼等には、一般に經濟的關心疎く、經濟と刑罪とを混同して平然たる武士の姿さへ見られたのであり、^③こ

うした事情は更に一層青陵の存在に光あらしめるものとなつた。青陵が己の態度を然く決定するためには、彼の教養及び時代の社會經濟關係が其背景として鋭敏に働い

てをり、彼の學ばんとした大阪の特異なる生活の發展があつたことを思ふのであるが、とまれ小論には、青陵によつて寫された大阪の姿を再現し、爰に大阪商魂の一面に觸れ度いと思ふ。

一

青陵は儒者であつた。だが通俗凡庸の儒者ではなかつた。「世ノ儒者タル者モ、僅カニ四書ノ講釋デキレハ、我業是ニテ濟ミタリト思フ。其少シクオアル者、又都會ニ住メル者ハ、世俗ニ聞ヘヤスキ詩文ヲ學ヒテ、少シ許ノ利ト名ヲ收ムルヲ以テ己カ業トシ、國ヲ經スルノ道ハ絶テ講セス。」と安井息軒が往事を追想して言つた儒者一般とは類を異にするものを青陵はもつてゐた。動もすれば^④正統儒者の侮蔑の對象ともされた近世の所謂御勝手直し又は身代直しとしての卓越する内容が、青陵の儒者一般と異なる特殊性を規定する。

青陵が「稽古談」「富貴談」「東隱」等に録する自傳的敘述を綜合すれば、彼の生家角田家は青山侯の代々家老(祿

五百石)を勤めた武士であつたといふ。後、父は事に依つて青山侯を致仕し、漸て尾侯に召さるゝ迄、暫く浪居の日を送るといふ變化があつたが、其も青陵の生活を脅すには足らず、平和な練學研精のいとなみが續けられたのである(大典)。父も子の志向を知つて氣儘に學問すべしと青陵に語つたといふ。青陵の學究的性格は早く彼のものになつたといへる。

青陵は己の學問に關説して、「鶴は唯文章すきにて、何派の學問など、いふことは大きにきらひなり、わかき時から何派の學問でもなし、即鶴が一家の學なり。」といひ、自らの學問の獨自性を誇稱してゐるとはいへ、幼時より成年期に至る彼の教養が、徂徠派の儒者宇佐美瀧水によつて與へられ、^⑦護國學が彼の思想の根柢に培はれてゐることは、彼の活動を決定する一契機として考ふべきであらう。朱子學派或は堀河學派が個人の道德的完成に儒學本領の具體的意義を見出したのとは異り、實學を説き、儒學の本領を政治に置き、治國平天下を以て、學問本來の生命と觀する徂徠學の理想が、彼によつて汲み取

られ青陵の學問の礎石として與つたことを思ひうる。

青陵の生涯は寶曆五年——(西一七五五)——文化十四年の營みであつた。此間に彼は尾張・尼ヶ崎に官仕するの經歷をもつて

はるるが、官仕は眞に彼の希望したものではなく、自由の天地に想を練り、一流の所説をふりかざして、世に説き人を導くことが最もよく彼の願求に適うてゐたのである。「鶴ほどの諸侯よりも合力をもらはず、それゆへ身心はらくなれども、又閑暇もなきなり。中略 衣食の資を得たるすきま／＼に、すこしづゝこのようなることを書くことなり。」^⑧ 講書述教の自由な天地に生きることが彼の性分にも合ひ、學問的要求にも一致したのであつた。大儒伊藤仁齋が藩仕を斥けて洛に學燈を消さず、自由を確保した其意識にも似て、青陵も亦眞儒たるの本領をよく自得したのである。^⑨

彼は此環境を眞摯な研究的態度によつて貫いていつた。「二十二より當年五十一に至りて三十年間、不才を守り懶惰を遂けて、他人の怜悯を少しも羨まず、他人の篤實を少しも慕はず、美衣を着せず、美食を喰はず、安

宅を求めず、いつもいつも着たるまゝ、喰たるまゝにて、借屋の學寮へ沈まり居て、妻妾を持たることなければ、子孫あらうはずなし、何卒性の近き所を成就せんことを願ひて、此れを樂みて、何より面白きことゝ思ひて、遊びあるくことも、みな不才懶惰の病疾になりたるゆへなり。」^⑩ 淡々たる青陵の生活が窺はれよう。彼は意の動く儘に海内に歩を延し、經驗の豊ならん事に努め、求に應じて自説を開陳し、以て利用厚生の道に勵んだ。東海道を往來する事十回、木曾街道を二回、北陸道を一回来往し、有名の高山に登りたるは數百ヶ所なりと。かく彼の行動からも、吾々は青陵の内容を考へる示唆を與へられるのである。

二

本論に進むに先立つて、徳川時代に於る大阪の社會經濟的地位を一瞥する。

「浪花の地は日本國中船路の樞要にして財物輻輳の地なり。故に世俗の諺にも大阪は日本國中の賄所とも云、又

は臺所なりとも云へり。實に其地巨商富佑軒を並べ、諸國の商船常に碇舶し、兩川口よりして市中縱横に通船の川路ありて、米穀を始め日用の品はいふに及ばず、異國舶來の品に至る迄、直ちに寄場と通商なる故、何一つ缺るものなし。⑫ 國內市場の中樞に立ち、「天下の臺所」又は「賄所」の呼名を以て汎稱せられてゐた商都大阪の素描が爰に在る。本願寺時代の宗教的色彩、秀吉時代の政治的色彩、夫等と範疇を異にする經濟的意義が近世大阪の存立條件であつた。近世大阪商人が京都・江戸等の都市を小賣所と稱し、物價も大阪・京都・江戸と次第上りに騰貴した事情を思へば、百貨輻輳の此地が國內消費生活に及ぼした實際的意義は窺ひ得る。商業資本の工業資本への轉化が、諸種の事情で阻止されてゐた此時代の都市經濟活動に於て、壓倒的優勢を示したものは商業であり、工業は幕末經濟關係の變動によつて、機械制的マヌファクチュアール形態への移行を許さるゝものがあつたといへ、時代の大勢は手工業生産の領域をいはず、商業資本への從屬を繼續したのであつたし、此意味に於て商

業は大阪の生命を形造つた。必然そこへは商業利潤の流入蓄積があり、かくして蓄へられた大阪の富は、其活動舞臺を都市農村への金融に見出し、かゝる富の再生産は、大阪を「問屋と兩替屋」の都市とすることによつて、聯關的に商都大阪の實體を裕にした。大阪の經濟的充實が明白となるに伴ひ、此地商業の勢力範圍も擴大され、青陵活動期に於ては、全國の大貨は殆ど之を大阪に廻漕し賣却を果さざるをえざる状態となり、「昔ハ大阪調達をせぬ諸侯も近年ハ大阪調達始りたり。」となり、權門勢家の大阪富商に金融を乞ふ怯々たる姿が大阪に力あらしめてゐる。「誠ニ海内一之大都會、依之大阪衰微すれば天下の衰微、實以大阪は天府の國也。」とか、「大阪衰微すれば諸國も衰微する道理あり。」など、大阪の富商草間伊助は其筆記にのべてゐるが、此の如き經濟活動を徳川時代全期に亙つて略々持續けた大阪は當然其影響を都市の心理的内面にも附加へてゆく。

近世の都市心理は其生成及發展を貨幣經濟の伸長に約束せしめられる。拜金を第一義とし、世の中を欲の世の

中と觀する心構へは貨幣の支配する心理である。身分も格式も貨幣の前に頭をたれる金力の支配が可能な期待を持ち得るのは、都市を措いて此時代他には有り得なかつた。其處は武士社會に常に見られるような形式的束縛はなく、自由と變化とが兎に角都市本來の生命であつた。

爰に住む人々は町人といはれ、武士は特別の觀念を以て彼等を取扱つてゐた。士農工商身分別の層位觀が指示す如く、工商は農に劣るものと蔑視され、工は物貨生産を擔當する故猶商に勝るとされたが、商は何等生産的勞役に服せず、只有無の融通を便するにすぎず、而も利勸を逞しくして貪利是れ事とするの輩であり、農工に下位するものと觀念づけられた。廣瀬淡窓が商以外の他民は教によりて兵卒の用に立得べきも、「四民の内但商のみは何十萬ありとも、戰場には用ひ難し。」と述ぶるに支配者の商人觀を覺知しえよう。此蔑視觀からは商人に道徳的人格を必要とする認識は生れてこない。商は生來背徳的のものとして觀念づけられ、商的行爲の一切が厭惡さるべきものと思料されたのである。武士一般を通ずる此態度は

いはゞ社會の專業化を決定し、之等分業の限界を設定するといふ結果を現實に誘致したのであり、都市商業の立場より見れば、武士が其封建的思想を楯として封建經濟の領域に強ひてたてこもらんとし、あらゆる商業活動を自己の手より放棄し、之を都市商業の自由によつて結末づけを意味してゐる。近世史はかゝる斷定によつて結末づけらるゝものではないが、尠くとも享保以前に於てはさうであつたと言へよう。鎖國が海外への市場獲得を拒絶してゐたがために、國內市場の開拓のみが商業に委ねられた世界ではあつたが、平和が經濟を促進し、貨幣經濟の進度と共に、封建經濟は内攻的に新興經濟様式に其活動を制せられ、都市民の生活は充實を加へてこななければならなかつた。かくて都市は最も早く近代的思想の洗禮を受け、初期資本主義勃興期の土地に相應しき人々の考方が、一方に封建主義の思想が高く聳え立つてゐるにも拘らず、都市を其氛圍氣に捉へたのである。此意味に於て大阪は最も顯著な存在となる。固より此場合、一般原則の特殊化の現象は個々の都市を夫々の特異性に於て色別

した。江戸と京都と大阪と此三大都の上に見ても、略々類似の經濟制度が其處に生れて居りながら、都市民の氣風の上には自らなる區別がある。江戸の武士化、京の公家化、之に伍して大阪は全く商人の都であつた。「天下の町人」の誇も大阪にこそ與へらるべきであり、日本商人の商魂は大阪の地に於て育てあげられたのである。徳川時代商家の理想的なものをいふのに、「主人は大阪・女房は京都・番頭には江州・藏番には長崎・小僧としては江戸」の語があるが、主人を大阪にとる所以、よく大阪商魂の意義を認識したものといへよう。商に執着し商に樂しみ、士農何れの身分よりも浮動性多き職業に身を投じて、「親吉・子樂・孫乞食」の俚言に云はるゝ浮沈の環境に生き、金錢を何物にも勝る氏系圖と觀じつゝ、利害打算と商機把握に身と心とを勞しつゝ、錙銖の利をすらゆるがせにし得ない商業の約束に捕はれては、有財餓鬼のそしりをよそにひたすらに利益の追求を之れ念じ、井原西鶴のいふところの智慧と才覺とに浮身を窺した當代大阪商人が比類なき商魂の持主であつたことに疑の餘地は存

しない。「大福とならんと欲するには無常を少しも觀ずる事なかれ^{中略} 金銀をば君の如く神の如くおそれたふとみて、從へ用ゆる事なかれ、恥に望んでも恥とせず、衣食住のつるえをはぶき、己の業をおこたらざれば大福人となる事忽なり。」^⑩大福長者の此言に、「嘘を資本」とし、「金錢はきたなくもつけてきれいにつかふべし。」とした逞しい利殖の觀念の裏書きされるものがある。大阪の富裕たり得し所以亦爰に在り、其は利殖を念ずる人の考慮の對象として充分なものであらねばならなかつた。

三

宿青陵と大阪との關係は、彼に關する傳記的研究の不備な現在詳細を盡し難く、著書中の散語によつて之を推定しなければならぬ。

二十二歳にして官を辭し、江戸日本橋に學寮を開いて儒講の生活に入つた青陵は、三十五歳の上洛を機に、之より晩年に至る迄の生活の本據を京都に置いたようである。京都黒谷に彼の墓が存することによつても、或は又、

「唯今に至らば初よりは十五年にも及ことなれば、京人とはかり人々心得て居るようになれり。」と云ふに見ても、青陵と京都との關係深きを思はしめる。大阪に近き京都に彼が住んでゐたことが、既に彼と大阪との接近を考へしめる。彼の生活内容を見れば此接近は其當爲を認承されえよう。

彼の門人が農商民に多かつたことは青陵自ら之を記してゐる。^⑭上方儒者としての青陵の活動對象は先づ庶民社會に置かれねばならなかつた。其は、彼が藩仕を無用のものとし、浪人學者として獨立の天地を保持しようとする必然の結果であり、活動の物質的基礎さへもが此間に獲得されたのではないかと考へられる時に、事情は更に明白となる。庶民の智的啓蒙者となり、又は商家の財政顧問として其生活の内部に迄交渉を持つ必要が茲に生れる。自然大阪が青陵活動の舞臺として齎されねばならなかつた。

青陵が大阪に二年乃至三年の生活を送つた事は、「大阪住居二年あまり」^⑮「大阪に兩年すみ京に六年すみたり」^⑯

「鶴大阪に三年住居せしに」^⑰「大阪には出入二年おりたる故」^⑱等あるによつて明らかである。龜山の用達富商富永宗介との交情を記して、「此富永ハ親ヨリ鶴ガ門人ナレバ、上京スレバ是非ニ鶴ガ家へ來ル事也、鶴モ下阪スレバ是非富永ヘヲチツク事也。」と記すより推して、大阪に住居しない時にも、青陵が大阪と交渉を持つた事が分る。青陵が此地に通俗講演を試みた事の明證は、「鶴昔攝州に遊びし時、文章の法を數十人の少年に授折節」^⑲とあるに徴し得る。こうした事柄の外に、大阪のいはゞ心臓部ともいふべき金融の世界に、青陵が深い交渉を持つた事實を知るのは興味を惹く。

自註、たのもし講になる、なり。

「至極なれて巧者なる人大阪にあり、鶴が門人のうちにもあるなり。」^⑳と記すに、彼が大阪の金融業者と知己あつた事を知るのであり、大阪富商加島屋安兵衛・同彌兵衛・富永宗介・和泉屋利兵衛等との親交が彼の著書に現れてゐる。青陵が藩・寺社等の金融に關係し、金銀融通の事に就て大阪富商と交渉のあつた事は、「綱目駁談」の次の記述が之を證明するであらう。「東叡山ノ金ノ事コノマ

へノマへノ便リニ委細ニ申シ述タリ、中略鶴イヅレ上人同道ニテ、來月四日五日ニハ是非々々下阪セネバナラヌ勢ニナリタルユへ、金上リシダイニ上人ト同道ニテ下阪スルハズ也。又鶴下阪スレバ富永宗介、左藤周徳ヘモ談ズル事ユへ、脈ヲトリテミテ金ノ出アンバイヲ見ル事也。²⁷「宮様ノヨリ原半左衛門・小島文平ノユク立ナドヲ、鶴ニイフテモラヒタキ也、富永左藤ヘモ又々口ゾヘヲシテモラヒタキ也。其上鶴下阪スレバ、又外ニモ銀主ノツケヨフアル也。」²⁸之等の場合青陵は努めて金談から遠ざかり、「儒者の金談大阪の大法度」の世約に忠實であらうとし、「凡ソ相談ノ中ニテモ又金談ハ別シテ儒者ノスベキモノニアラズ、凡金談ノコトハ鶴以來ハ下役鶴九ナドアラバ相勤ムベシ、下役ナシニテハイヤ也ノ、大イヤ也。」²⁹といふのであるが、事實は其を否定するものがあり、「去年よんどころなき方より頼れて、金談を大阪へいひこしてやりたることあり、鶴思ふに、鶴は儒生のことなり、ことに金談しつけぬことなれば、金談を引き合はすことは自由になれども、談ずるには事のわかる人の巧

者ものが宜しからんと思ひて、事になれたる巧者の老人五十ばかりになる、もつともらしき人を中へ入れて、其人を大阪の内人の方へやりたり、委細は手紙にくはしふあれども、猶又中の談しられよといふてやりしに、先方よりの返事に、あれでは談し出來ず、凡そあのような事になれたる人をば甚大阪にてはきろふなり、山師らしふて甚いやがる也、やはり鶴にちよつとくだれと云ふて來れり、このわけは鶴は年もよりて、大がい諸國の人も鶴が名前をも知つておることなれば、山師でなきことが明白にされてよい、談しはぶこうしやでも、人物の丈夫なるがよいと云ふ心なり、ゆへに頼みたる方よりわざ／＼鶴に下りくれよといひて頼むゆへに、よんどころなふ下れり。」³⁰と述懐するに真相が述べられてゐる。

青陵と大阪との關係は決して傍觀者的なものではなかつた。單に大阪にふれると云ふのではなく、大阪の内面に迄透入したのが青陵であつた。之故に大阪の商魂の彼によつて觸發さるゝものゝあつた事を知るのである。

四

大阪が青陵を惹きつけ之が觀察の興味を抱かしむる所
 以には、大阪の内容の働くものあるは云ふ迄もないが、
 其一半の理由は實に青陵自身に在つたのである。

青陵は極めて謙讓に自説が土民論迷のものであり、士
 大夫のためにあらざることを言ふのである。^{③①} 此言葉は恰
 も彼の興味が商人又は農家の啓蒙にのみあつたかの如く
 思はしめないでもない。勿論、彼が庶民の爲に多くの時
 間を割いたであらうことは推定できる。然し、單に其の
 みに終りえなかつたであらうことは、修身齊家治國平天
 下の儒學の要請よりして自ら來るものであり、青陵が口
 を開けば嘲罵する俗流儒者への難詰よりしても考へうる
 論理的結論であらねばならぬし、他ならぬ彼の活動(稽古
 談・海保儀平書等に示される藩政治との密接する關係)が
 雄辯に之を物語る。自家の説士大夫のものならずといふ
 謙讓の言葉が洩らされるかと思へば、「是こそ今の大名を
 救ふよき手づるなるべし。」^{③②}といふ如き明白なる表明がな

されるのも矛盾ではなく、學問當然の發展があつたに外
 ならない。爰にこそ正しく青陵の熱意が傾けられたので
 あり彼の本領發揮があつたのである。

幕府政治の論評は青陵自ら之を行はざることを言ふて
 をり、^{③③} 武士政治を論ずる藩政に關與するのであるが、當
 時に於て藩政改革の究竟の途は、彼の意見に従へば、「惡
 人のできぬよふに、罪人のなきよふにせんとならば、先
 づ富ますにしくはなし、富むがとんと始りなり。」^{③④}であ
 り、「外は大阪の金銀應對、外は産物まはし、」^{③⑤}をこそ要
 急の務とするのである。青陵は近世儒者の品評を試みて
 一方に熊澤了介を評しては、「算用に詳ならぬ人」といひ、^{③⑥}
 他方白石と徂徠とに注意し、特に徂徠に對しては、「徂徠
 はなるほど古今澤山になきよき學問の人なり。」^{③⑦}と讚辭を
 呈してはるが、然し青陵の見地は、經濟立直しの方法
 に就ても、既に徂徠と同一ではなかつた。嘗つて享保期
 の蕪生徂徠が明白に代表したところの封建的自給經濟の
 能ふかぎりの維持擁護に努め、之が破壊的要素たる貨幣
 經濟に極度の憎惡をよせ、都市農村の對立的關係に留意

し、究極に於て、「商人は潰るゝとも構間敷なり」と放言した其立場とは別個のものであつた。等しく護國の學流に浴して二者別異の見解をとるに至つたことには時勢の進運の明らさまに作用するものがある。經濟が實地の學であり、其處からのみ適法の考按が可能であるとの認識は既に近世一部の人々には常識化されてゐた。儒教論理の機械論的適用が何物をも生み來さないといふ自覺は青陵に於て強烈なものがある。貨幣經濟から離れて武士經濟の超然たる存立が最早如何様にしても期待しえない當代の社會事情が青陵の眼には焼きつくす様に照破されてゐる。とはいへ青陵の立場は貨幣經濟に加擔するのではなく、貨の本源を百姓と武士とに置き、「この本と云處でふやさねば、ふへぬ理也。」とするのが彼の本質である。日本國土を評しては、「我國などは地球上第一の國土なれば、支那の風俗とは格別に違ひて宜き風俗にて天理を受ける所も偏なることなしと見ゆるなり。」⁽⁴⁰⁾といつてをり、封鎖的封建日本の意識すら彼の持つところとなつてゐる。

「孔子、孟子の時は無道の亂世なり、今は有道の治世也、今

の世に孔孟の言葉をかたかしぎに信するは密武子に見せたならば、さぞわらうことなるべし、中略亂世には孟子の世の如き天理にかなふなり、今の世に孔孟のときの無道の世を準とすること勿體なきこと也、吉例にあらず、やはり治世のしかたを書たる周禮を準とすべきことなり。」⁽⁴¹⁾と青陵はいふ。或人の「今の時に當りて國主大名の政を修むるに、民を質素朴實にするが宜きや、奢侈浮華にするが宜きや。」との問に對して、「國主大名は其國ぎりの主也、民をば己れが自由にすれども、民の風俗を自由にすることはならぬ也、民は其國の民なり、風俗は一天下の風俗也、一町の町を天下に譬ふれば、國主は三間口五間口の家持也、己れが庭の樹木は己れが自由になれども、庭を吹く風は己れが自由にならぬ也、一町内西風が吹て、己れが庭許り東風の吹く様にとはなるまじ、西風が吹きては此方の勝手に大いにあしきがと思ひても、吹けば仕方なし、然れば氣を揉みても拳を握りても、詮の無きこと也、やはり天の吹く風に付て、其吹く風を用に立つ用に受るより外工夫無き也。」⁽⁴²⁾と説くのである。こう

した考方から青陵は經濟社會の當時の狀態を其狀態に於て了解し、強て之を封建經濟本來の姿に還元するといふ如き形而上主義を取らず、寧ろ進んで之への適合を企て、爰に武士經濟の活路を見出さんとするに至つた。所謂武士商人化の爲の實行的經濟論の提供に彼の本意はひそんでゐる。徂徠が理想主義へ偏倚し、復古的計畫に走り、現實と背理的な主張に導かれたに反し、青陵は合理的な立場を取り、現實との協和に進み、爰に明らかなる差別を劃するに至つた。

青陵は儒者の古説に泥んで變轉の妙理に達しえないものを腐儒として斥ける。學問も「今日只今のことにくわしきがよき學問」⁽¹⁰⁾とされる。

總てを實際的效用の基準から判定する。之と同じ考から青陵は利勸を賤しむ、商を斥くる武士の態度を鼻持ならぬものとして冷笑してゐる。熊澤蕃山が「集義外書」⁽¹¹⁾に武士の利勸を賤しむはよし、然れども算數の事を迄賤しむは邪道なりとして武士を戒めた態度にも超過して青陵の言葉は辛慄である。「武士の風として金を賤しむこと

なり、金を賤しむゆへに金へらへらと無くなり、金を貴ぶ人をば大に笑ふて商賣中の人なりと云こと武士一統の風なり、商賣人の風とて笑ふほどなれば、己れは商賣はせぬかと云へば、先大國の大名より年々米を賣りて金にして、扱公用を勤め萬事と、のふなり、米を賣るは商賣なり、大國の大名より皆商賣中の人なり、商賣中の身分で居ながら商賣を笑ふゆへ、己れが身分と所行と違ふなり、貧になるはずのことなり」⁽¹²⁾。武士窮乏の一因を彼等の封建的思想に求めようとする。而して封建的精神の許容する範圍内に躡踏する限り、武士の救済は來り得ないと説く。嘗つては商侍を侮蔑することが正しき武士の道であつたかも知れないが、「今の世は隣國にも油斷せられず、自國をも油斷なふ養はねばならぬ時なり、隣國にも油斷ならぬと云は、亂世の攻伐の類に非ず、賣買損徳の事なり」⁽¹³⁾といふ有様になつてをり、従つて「算用ごとも治國の一ヶ條なり、をろそかにすべきことにあらず」⁽¹⁴⁾。武士の商心は寧ろ治道に協ふものとさへならねばならぬ。主從恩義の關係も青陵をして言はしむれば、又商心の左

右するものであり、決して超俗するものではなく況んや美なる倫理の紐帯ではない。古へより君臣は市道なりと云なり、臣へ知行をやりて働かす、臣はちからを君へうりて米をとる、君は臣をかひ、臣は君へうりて、うりかいたり、中略天子は天下と云しるものをもちたる豪家なり、諸侯は國と云しるものをもちたる豪家なり、このしるものを民へかして、其利息を喰ふてをる人なり、卿大夫士は己れが智力を君へうりて其日雇賃錢にて喰ふてをる人なり、雲助が一里かつぎで一里だけの賃をとりて、餅を得酒を得るに何もちがひなし。⁴⁵」主従關係の規定要素を明らかにさまに物質的要件に置く。他ならぬ儒者青陵によつて儒教倫理が烈しい反駁に會つてゐる。此の如く武士に對して經濟心理の更改を説く青陵にとつては藩經濟の建直しも孔孟論の直譯丈では不可能とされる。「一體國を富すは其よふに六ヶ敷ことにあらず、唯武士の目鼻のつきよふがちがふてをるゆへに、わざ／＼貧をするなり、眞の面目にさへなれば、むきに富むことなり、世話やきよふゆきとゞかぬゆへに貧なるなり。」⁴⁶青陵はかく

述べることによつて、富國の道に眞の面目があり、世話やきよふゆきとゞく筋合あることを洩してゐるが、その眞の面目とし、世話やきよふゆきとゞく筋合であるところのもの、青陵は何を對象とし、何に依據することによつて自己のものとするのであらうか。此事に就て彼は言つてゐる。「左れば理を稽古すること甚早し、理と云ふことは書を讀で始めて會得するものには非ず、書を讀ぬ方が反て早き也、中略書を止めて生きたる世界をとらへて、ぎり／＼と推て見るほど早きことなし。」⁴⁷孔孟教説の權威將にすたれて實證主義的態度はきはやかである。吾々は是を思ふにつけて、大江季彦が、「浮薄不實の徒、忠孝信義を以て陳腐とし迂遠とす、是三才の童子も能く知り、堯舜以來の通り文句、ふるし／＼と嘲り笑ふ、故に經驗を擧ぐ。」と論ずる當代人の智的態度に注意を惹かれねばならぬ。經驗論的實證主義の精神が人々を捉へてゐる。時代のこの變化せる思潮に棹して、青陵も亦經驗世界の只中に自家智識の大成を企て、いつたのである。そして彼が最も強く經濟問題に興味を寄せてゐるこ

とよりして、貨殖と金融の府大阪が彼の注意の對象となつたであらうこと亦言ふを須ひぬ。貨殖をいひ富裕を説く時、青陵が屢々大阪を引き、「唯見當を大阪と見て、楫をとりてそりく」と貨殖する風に移るよふにすること也⁽⁵²⁾といふのも、彼の大阪觀察が單なる紀行文の叙述に終りえず、其内面への秀拔なる把握を約束せしめたものに外ならぬ。要するに、青陵の究學の態度は其大阪觀察を價值づけ、大阪の真相を彼に寫さしむるに與つたのであり、後人をして大阪市民の過去の生活と心理とを其有りの儘の姿に於て窺測せしむる所以である。

五

「大阪ノ人ハ富ヲ貴フ。其意ニ曰ク、公卿官祿高シト雖モ、貧シキカ故ニ、我輩ノ商賈ニ手ヲ下クル。世ノ中ニ富ホト貴キ物ハナシ。」⁽⁵³⁾と。大阪の儒者廣瀬旭莊は大阪の人情を評して言つた。黄金を繞る大阪の人情は他の何地もが夫れに匹敵することを許されない程度に洗練されたものを持つてゐた。大阪の商魂といふも畢竟黄金を繞

つて練成されたものに外ならない。青陵も亦爰に注目の方を放つてゐる。

富を貴ぶ大阪の人情は貧を憎むの心である。「大阪の貧をにくみて富をこのむことは天性なり」⁽⁵⁴⁾青陵がかくいふには、等しく此時代の都市民でありながら、宵越しの金は使はぬと自惚れ、貧は愧るに足らず、尊ぶべきを官爵とする江戸の人情が、餘りにもはつきりした對照をなしてゐたからでもある。「武家は日本國中皆江戸風なり、ある金を貯ることのならぬ性なり、あれば無ふなりてしもふ也、中略凡そ江戸は町家職人と云とも、此武士の風うつりて金を貯へることならぬ風なり、是は土地の風にて江戸に混じて居れば是が人間一統ク様なるものと思ふてをる也」⁽⁵⁵⁾土地の此風習は一朝一夕に變化し得るものではなく、夫れ丈土地の人々の生活及心理に密着してゐる。大阪の商家にて貧乏神をいやがること甚しく、月々行事に貧乏神はらひが行はれたのも此心理の反映として解釋される。

其は、商家に恵比須大黒を祀り、或は男女の陰陽二物

を模造して神棚に拜し福運を壽ふくと同一の俗間信仰であらうが、「大阪にては豪富の家には皆送窮の式ありて、毎月々々つごもりにはきつと貧乏神を送ることなり、是れ即ち貧をいやに思ふことをわすれぬ爲なり、京にも江戸にもこの式なし。」⁽⁵⁶⁾と青陵は意義深く其を書いてゐる。風邪豫防の爲に風の神を送ることは各地に見られても、風邪よりいやな貧乏神を送るのは、貧を憎む大阪の徹した人情丈が生みえたことであつた。毎月晦日に其家の番頭自身臺所にて、焼味噌を二つ大ききう作りてやく。焼味噌は貧乏神の大好物である故、大阪では焼味噌は嚴禁され、味噌はやかぬものと定められてゐるが、晦日に限つて之をやく。其理由は焼味噌のほひを残らず家内中にゆきわたるようにして、家内中の貧乏神を残らず右の焼味噌の所へ集めんとする仕掛である。扱貧乏神臺所へ集りたりと思ふ時分に一つの焼味噌を手にて割り、わりくちをあけて臺所中を持って廻り、最後に焼味噌の口を堅くしめて川へ流すのである。残りの焼味噌も前同様之を割り、口をわんとあくようにして、口をひろけて旦那の居

間より、見世、居間、次の間、女部屋、男部屋迄はしりまはつて其間の貧乏神をのこらず味噌の中へ入れて、口をしつかりと流す。其番頭は衣服などをようはたいて、味噌の臭氣をないようにして家に入る。送窮の式は是で終るのである。兒戯に類する此行爲の中に貧の厭ふべきことをよく／＼家人に知らしめんとするのである。大阪人の生活は日常茶飯のことに於ても他地に異つた様式が認められる。例へば散財にしても、江戸は目にしたゞ散財し、五畿内の風は目にはつきりと見ゆるようにする。「譬へば江戸にては客があらても、汁と平皿にて飯を喰、唯獨飯をくふ時も汁と平皿にて飯をくふなり。五畿は獨りくふときは茶漬をくふて、客のある時は焼物、猪口まで附てくふと云氣味あり。」⁽⁵⁷⁾京の朝がゆ式生活の切盛りも、青陵に言はすれば物入かゝらぬ所作とされる。

貧を憎み、消費にも輕慮を戒しむる此人情が、富殖營利の世界に於て、殊更に銳利なものを生むは豫斷に難くない。青陵も之を觀じて「金ヲ取ルハ大阪ホド丹鍊ナル

地ナキ也。」⁵⁵とか、「一體大阪は利のことは妙にくはしき處なり。」⁵⁶といふ批評の言葉を下し、果は人間業に非ずと斷じてゐる。⁵⁷夫れと共に大阪の營利的活動が洒落な筆致によつて描きだされてゐる。

商人が營利に走る。而も細利をもおろそかにせず、其間に富裕を期し生活の向上と社會の尊貴とを克ちうべき商人であれば、「財を持ってこそ、世にあるかひもあれ、命ありとて財なくば、生てのかひなしとおもふ。」⁵⁸との處世觀こそ眞率な叫びであらねばならぬ。商道は王道を非とし、霸道を是とすべきことも亦致方なき次第である。「言て見れば人として金をもふけんとせざるものはなき也、天下中の人皆金を儲けたがることなれば、面は親しみ睦まじき體にても、心中は相互に競ひ争ふなり、競ひ争ふは角力を取るにちがひたることなし、角力は向ふ人の透まをねらひて差込むこと第一なり。」⁵⁹青陵は今の世の人の心理と、此世に處して富貴たるべきための辛苦を明らかにしてゐる。「人といへるものは、日々おのれが渡世にのみ心を勞して慰むかたなし。たとひ外にいかなるたの

しみをなすとも、其中に利を得んと思ふ心のはなる、時しなければ、心のなぐさめにならず。たゞ夜眠たる内ばかりまことのたのしみなり。」⁶⁰一商人の此述懐が正に其に答へてゐる。王道行ひ難く、「上下ともに皆狂狷ゆへ、少しにても、うっかりひよんとして油斷をしてをる國があれば、忽ちに貧乏といふ惡水をぬきて、其油斷の國へ落さんと、日夜朝暮に此を工夫しておる。」⁶¹當世では、「さすれば一刻も早く彼輕薄鄙劣、暴惡無道のあしらひやうを稽古するに如くことなし。」⁶²とさへなつてくる。とはいへ此方術の修得は容易の業ではなく、時と處とによつて修練變化の妙が加へられねばならぬ。さもなければ陳腐の見は免かれず、富殖は企て及ぶべくもないのである。西鶴が大阪町人に町人道の實踐的教條を説いた時、智慧と才覺とが何を措いても必要であるとのべるのも、大阪の現實に照應するレアリズムの發現があるとしうる點に一層の興趣を覺えさせられる。大阪が此事に就て何の拔りがあつてよからう。金は天下の廻りもの、はなれものでもちたるものが金である。「水の月鏡の影の如く、暫時

やどりておるぎりのこと也、金は出たがるものなり、散去したがるものなり、とらへておくことのならぬものなり。^⑧「こゝうした特性を持つ金を相手として、「入りかわり立かはり終始手前につきぬようにせねばならぬ。」町人は、文字通り貨殖に生き、生れ乍らにして商人といはるる巧利心を我物とする。「京は上品を好む故に、大阪のよふに貨殖することならず、江戸は懶惰ゆへに又大阪のよふに貨殖することならぬなり、大阪は人品をすてゝ、すたく働きて貨殖するゆへに、忽ち富人となるなり。」^⑨背陵の此言葉に違はない大阪の實際を彼の拙く次の諸事實によつて見る事ができよう。

大阪の船場に御用金の仰せをも蒙り御買米の役をつとめた一豪家があつた。其主人腰がいたむとて有馬へ湯治に行くといふ。別家或は番頭などが、しからば駕籠の者をやとはんとするを聞て、右のおやぢ大きに怒り、「此方は素町人なり、なんぞや駕籠にのるべき。」と言つて、木綿の布子に木綿の帯をしめ、わらじをはいて只一人有馬へ出掛けていつた。宿宿に着いておやぢのいふには、「わ

たくしは大阪の貧乏人なり、腰がいたむゆへに當所の温泉に少々逗留仕りたし、貧乏人のことゆへに、中々客にはなられず、されば臺所をはたらきて入湯するつもりゆへ、何卒湯は御ふるまいに逢たきなり、旅籠ばかりにて逗留仕りたし。」といふ。宿屋の主人も之を聞いて大に喜ぶ。扱このおやぢ骨髄のけいざいすきにて、臺所の仕末凡そむだなることをせず、食類のきりぎざみ、かひ上げ、魚のかひよふにも祕術を盡して世話をやく故、臺所入用頗る簡略となる。宿の主人大に感じて、「あの人はけしからぬ勤辨者なり、はたごどころでなく、給金をやりてもおきたき人なり。」といふて、此旨湯治客にも話す故、湯治客も亦彼のおやぢをたのみ、かれこれ逗留中の用事をとゝふるに、一向に妙に心やすくとゝのふ故、あすこでもこゝでもよびて相談する始末、飯じぶんには飯をふるまふゆへに、宿屋へは旅籠をはらふにおよばず、遂には隣り近處も聞つたへて彼のおやぢかして下されといふて、あたりきんじよへかりられる、始終二廻りをりて歸るつもりであつたのが、諸方にてあまり珍重する故

歸られもせず、又一廻りを、愈々留るを引拂ひ歸らんとするに宿屋よりは金二百匹禮をする、湯治客よりは南鐘を一片づゝ、隣家よりも金百匹やる、かれこれ二兩餘饒別をもらうたるを、彼のおやじ一向にとらず、別段に旅籠を拂はんといへば、彼宿屋仲々に受取らず、ぜひに饒別を受けくれよと迫られ、遂に一兩二朱をむりやりにふところへ入れられて、是非なく貰つて家に歸つて來た。さて大阪へ歸つて別家共よりあふて、さて今度は入用幾何か、りましたと問ふに、おやち唯一兩二朱なりとて先の金をだす、これはどういふことかとたずぬるに、おやちのいふに、「素町人が湯治にゆくに此方の金をつかふといふこと無きこと也、ひまをつひやしたるほどの立まへはとらねばならぬもの也、唯さきの爲になることをいふてきかせてをしゆれば、さきにも損にならず、此方にも損をせぬが渡世の第一と云もの也。」と。浪費は彼によつて強く否定され、鋭敏な經濟心理が躍動してゐる。彼には自家の富裕をほこり、湯治に千金を消す富豪者流の姿は更に無く、極めて露骨な貨殖の精神と、徹底した

平民主義とが示されてゐる。徳川時代の門閥尊貴の精神も大阪では其效力を充分に發揮することはできなかつた。富商と關係をもつ大名が、町人喜ばせの政策として、扶持を給し士分に取立てることが頻々として行はれ、大阪富商の此優遇を受くる者もあつたが、大阪の平民主義は此待遇を否定こそしなかつたが、決して其によつて貴族的な自己満足に走ることはしなかつたのである。「大阪の町人はとんと格式はなしとしたるものなり。」と青陵の言ふ通り、大阪第一の富豪とさるゝ鴻池善右衛門すら、雨天にても駕籠にのらず、一僕にて高足駄を穿いて勤めあるく状態である。灘の富家鹽屋清五郎が其實實の故に、青陵を驚したのも忘れえない事であらう。「をしつけ澁染の長まへだれをしたる男一人來れり、長まへだれとは、上の方は腹がけのようにして、下の方はまへだれなり、江戸の車ひきのかけるもの也、木綿布子、木綿帯、わらざふりなり、腰より喜世留をぬきながら福田へ入來る、喜世留さしは皮のさけたばこ入り也、江戸の車ひきのさけてをるさけたばこ入りなり、福田へすと上る、

手代ひろふしてこれが主人清五郎でござると云へり、鶴
びつくりして、はてさてケ様のなりふりの人が、このよ
ふなけつこふなる別業をつくると云は、なんとも合點
のゆかぬ事なりと思ひしなり。^①青陵の不可解とする状態

の中に、富豪の裕な生活の一面と飽迄町人本來の立場を
忘れず利殖に勵む大阪商魂の一面が浮出てゐる。こうし
た態度で商賣專一に勤むればこそ金銀も流れ入るのであ
る。「眞の金持町人は臺所の見ゆる處にて飯を喰ふ。」の
言葉は、貨殖に格式は禁物であり、平民主義こそが其目
的に協ふをいふのである。かくして青陵はあらゆること
を貨殖に歸一せしめ、爰に大阪商魂の顯著なる部分を見
んとしてゐる。「大阪にては右のをちこほるゝを箒にて
はきためて袋へ入れてもちかへるものあり、乞食のよう
なるものにて乞食にもあらず、輕き町家、村方の□女々
どもなり、是も大阪にては株ありて、其株をばうりかい
をする由なり。^②大阪各處の米陸揚におちこほるゝを掃き
集め、口すぎにいそしむ之等細民の姿にも、細利を捨て
ぬ大阪商魂はありとされる。京の着倒れ、大阪の喰倒れ、

堺の建倒れの言葉は此地方の奢侈觀察であらうが、奢侈
の反面に質素があり、浪費の裏に蓄積があつた事を忘れ
てならず、大阪商魂は此複雑な生活に自己鍛練の舞臺を
見出してゐたのである。

藩と大阪富商との金融關係を論ずる部分で青陵は仔細
に大阪富商の動きを觀察してゐる。

「升小談」の如きは其爲に著作されたといへよう。金融
は實に大阪富商の獨壇場であつた。倅金融に對する富商
の心構へは細利をも疎にしないといふ點に其用意が見え
る。本來大名貸しは町人にとつて極めて有利なる事業で
あつて、三井高房が、「扱その大名借の金銀、約束の通取
引有之候得ば、此上もなき手廻しにて、人數はかゝり不
申、帳面一冊にて、天秤一挺あると埒明き、誠に正直の
寝て居て金儲けとは此事也。」と云へるに見ることが出来
る。乍ら然大名借は何時踏倒しをうくるかも知れない危
險性を持つてをり、夫れ丈大名借しには高利を伴ふを常
とする。大名の經濟が疲弊し、金錢に對する欲求が熾烈
であればある程金利漸高の形勢を導くのは止むを得ない

であらう。「凡今は金の利大阪にてはけしからず上りて、むかしとは大きにちがふなり、新規借り入れは一割二三朱など、いふことなり、大國は大金を借る、年限十年か十二年なり、利も七八朱なり、これは年限中は七八朱の利をきつと一年に三度か四度に計算する、七八朱といふ金は數代借りつけたる家でなければ出さぬなり、扶持米も澤山にとりておる、付届進物も澤山にとりておる。控へ屋敷に火災ありても、材木を進物にすると云ふよふな惡意でなければ、七八朱と云金は出来ぬなり。」⁽¹⁶⁾こふした高利貸付を營んでゐる大阪富商には此利息以外の収入が大借しによつて約束されてゐた。「扱金を出したる屋敷よりは扶持米をよこす、箸のころんだにも目六を送る、伏見へ出る目六なり、扱紋付の上下、時服、扱端物、扱國の産物、扱四時の付届、寒暑の見舞なり。」大名は之等の方法を通じて自己に有利な貸借を繼續せんとするのである。此場合大阪の商人は實際の利息は愚か、利息以外の之等物品をも決して利外のものとは考へなかつた。爰に武士は固より他地の模倣しえない計量的精神が發揮さ

れてゐる。彼等は大名借しの危険性はよく之を知つてをり、其爲には何時踏倒されても踏倒されぬ丈の準備を平素用意して置かねばならぬ。大阪商人の大名へ金をだす心持は元金はとらぬ覺悟である。「大阪は金が代る物なり、大阪の金は江戸の金とは大にちがひて皆代る物なり、つかふてはならぬ金なり、譬へば米屋の米、呉服屋の呉服物の通り也、己れが宿にて用ゆべきものにあらす、是をまはしてふやすものなり、利息をうまするもの⁽¹⁷⁾也。」俗辭に残る「己が見たら金になれ、人が見たら蛙になれ。」式の金銀死藏は大阪商魂の喜ばざるところであり、多少の危険を犯してでも財の再生産を企つべしとされるのである。彼等にとつては金は全て資本である。大名借しに附帶する一切の利益を元金の内と見る。元金すみてしまふた曉にも猶利を疎にしない心掛が働くのである。「江戸の町人も武士にちがふことなし、利息の外にもろふたものは外物なりといふて、ばつ／＼とおごりちらすなり、これは皆利にうときゆへなり、大阪の算用銀主の腹中は、一向にそのようなることにあらず、皆元金と

見たるものなり、利息をも元金と見るなり、なんでもその屋敷より入るしるものは皆元金の内かへりとみるなり、一體大名へ金を出すはあぶなきものなり、先はとられるか知れぬなり、ゆへに取られぬ法をせねばならぬなり、金を取られても取られぬ法をせねばならぬなりと云ことをするには、この法よりよきはなし、何もかも皆元金かへりたると見るゆへに、元金のかへりたるをつかふと云ことなきことなり、外かものにあらず、元金なり、利をも元金とみて元金の方へ積むなり、扶持米も元金なり、端物も紋付も皆元金なり、或者この銀主茶を好めば唐津、井戸、とゝや、はんす、いなほなどゝいふ名器を屋敷より送るなり、この名器を元金と見るなり、すいぶんやすふ賤て直段を入れて元金を引なり、中略何もかも元金へ入れるゆへに、皆十年を待すして元金はかへりてしまふなり、新規に出す金は六年ほどに元金をとりてしまふ、扱元金をとりてしまふても、屋敷の方まだ元金は丸でかりておるなり、元金すみてしまふた上は、あとは外物としてもよさそうなるものなれども、これをも又つ

かふことならぬなり、これは今度屋敷へ出す用意の元金なりとして積むことなり。」^⑧

金融の府大阪の苦心の跡を人々は思起す事ができよう。「大阪にては利息を元金へ引くゆへに、人にやる金はなきなり、元金なり、あまり金はなし元金なり、あまり米はなし元金なり、第一始めに元金を引くゆへ、元金引取るまではあまり金はなきことなり、さて利息、進物、扶持米にて、元金を引くうちに又大名へ金を出す、凡そ金を出すと曰には、金をすてる心なり、すてたる金を段々に取かへす趣向ゆへに、他の大名へ新たに金を出せば、是新たに金をすてたるといふもの也、この新出入の大名へすてたる金を舊出入の大名の方で取返すつもり也、ゆへに舊出入の大名の元金すめても、又新出入の元金を引かねばならぬ理なり、如此算用をしたるものゆへに年中閑の金なし、餘り金なし、人にくはせる米なし、人に投る反物なしとするなり、皆元金なり。」^⑨青陵はこうもかいてゐる。是等の長き引用によつて瓊末の利をも忽にせず、貨殖に身を投じて營々辛苦の功を積む大阪商魂

の一面歴然たるを知る。「大阪風にすれば浮き金はなきなり、浮き金なきゆへに、金をつかふ事面白からず、心くるしきなり。」と青陵も大阪商人の勞苦を思ふて同情を垂れてをり、企業家の精神の發現に大阪の眞義を認めてゐる。

商業世界の繁劇に身を投じて、政治的非解放の境遇を自己の運命と觀じつゝ、ひたすら自己に與へられた天地に練磨の功を積み重ねていつた當代大阪商人が、商の世界に誰よりも優れた手腕の把持者となることは餘りにも見えずいた事柄である。「大阪の民もなるほど民なれば、愚なるべし、愚なるところは文武の學問のことなるべし、金銀かりかしのことは先祖代々の金かしなり、金をかしてそれを樂にしておる男どもなり、生れおちより金銀かりかしのことにのみ心をゆだねておる男なり、日本國中の武士の腹中をば、朝から晩まであつこふてをることなれば、よふなれておりて、中々武士なぞにだまされて金をかし、武士の辯舌にのりて損をするなど、云ふことはゆめさら／＼なきことなり。」

爰には金融の道にかけての比類なき大阪商人の腕前が述べられてゐるが、同時に夫れは近世商業社會が一個獨立の天地であり、於是は商家的手腕なくして何物をも律しえない事を語つてゐる。法を論じて法利主義の立場を取る青陵の心を満足せしめた大阪富商の家法も要は商家的繁榮の擁護にあつたし、例を金融の世界にとり、御頼談・講の形成或は締貸等に見られる團結の美德も市民利益の防衛の爲であり、貨殖を繞る大阪の特色發揮が顯著な存在となつてゐる。「一體大阪ハ徒黨イ、合セノヨウ成就スルトコロナリ、ユヘニ事大キフナリテ、金ノ融通ヨクテ金オチル也。」青陵の此觀察には利の爲に結合する大阪の巧利的な動きが示されてゐる。青陵が當時大阪に行はれた「實意借り」の商法を記して、「一たい大阪の人心は妙なる所なり、兎角理に叶ふよふにせねば、金はまふからぬとしたるものなり、中略實にくれば實にて受け、虚にくれば虚に受くるは天理なり、これで天道に叶ふとしたるもの也、中略天道に叶はねば大富を得ることならぬときめておることを會得すべし。」と云ふのには、

商魂の深き含蓄が示されてをり、巧みなる理財の手法が寫されてゐる。之等の勝れた商家的手腕を發揮して大阪は次第に世の經濟を己れの側へ引寄せてきた。青陵が大名家經濟建直しには、潔く眞相を打明け、眞情を吐露して、大阪商人に一任するを最良策とすと言つたのは、其眞面目に觸れたものといへやう。財を用ふるに周到の注意を缺かず、之を守るに保全の道あり、鎖國の環境下に、いはゞ鬱血された情熱を、商家的繁榮の爲に生かしていつた大阪商人商魂の一面を以上の記事は物語つて呉れるであらう。

結 論

青陵によつて描かれた大阪は貨殖の大阪である。學問・趣味等の大阪は彼の注意する所ではなかつた。等しく大阪の市民の中にも學業に専念し、其故に貧を招くを憂へず、遂には家業を廢する早野仰齋と其父の如き場合があつても、其は恐らく青陵にとつては商人道の本道を離れた價値少きものとして觀ぜられたであらう。銅臭の

紛々たる所にこそ青陵は大阪の眞隨を見出したのである。

所謂贅六根性により多く學ぶべきものを見出してゐる。其處には啓蒙された町人の姿は無い。ましてや彼の描く徳川時代大阪商人の型からは豪放大膽な發展の商人の型を汲み取ることとはできない。此事は徳川時代日本人の一般定型であるとされる。鎖國以前並びに鎖國以後に於ても此定型とは別な進取的商人の存在を見ることはできる。然し、此例外が支配しえなかつた商人のいびつな畸形的な存在が、むしろ徳川時代の商人を規定せしむるに足る一般性を持つてゐる。夫れは何等町人自身の罪ではなく、かくあらしむることに努力した徳川封建政治の所爲であり、其成功を物語るものである。「うへなみそ」の倫理主義に生き、自己を商業貴族に高めることを自ら否定して行く大阪商人の姿には、時代の暗鬱な空氣が後影となつてゐる。「今は京も大阪もりきまぬことがはやる也、りきむは損なり、りきむを辱るよりも、不繁昌を辱ること理なり、りきまねば繁昌する、りきめば繁

昌せぬと、とつくりと見さだむること今の急務なり。」^②りきまぬことが繁昌の元と説かれる其心理には長いものには卷かれる主義の霸氣なき個性の尊重が考へられてゐる。武士に依據し、之と和親の關係を保つ事によつて富裕を期待しなければならなかつた徳川時代商人の苦慮は適應的に個性の上にも變化を興へて其積極性を缺く日本商人の封建的性格を作り上げてゆかねばならなかつた。

「起きよ、日本の商人諸君よ、嗚呼諸君は何ぞ其れ熱睡を食ふの甚しきや、諸君知らずや、我日本の商業社會は曾て浦賀開港の東雲より王政維新の夜明けとなり、乾坤轉して今や將に紅暈高く天に冲せんとするを、惟ふに我國多數の商人諸君は此時に當つて、猶ほ未だ天保弘化年間夜半の長夢を攪破して自ら醒むることを知らざるもの、如し、嗚呼甚しい哉、諸君の寢坊なるや。」^③徳川時代商人の覺醒を叫ぶ聲が明治に入つて高く揚げられ、徳川時代的商人型の變改が望まれたとはいへ、乍然一面より考ふれば稀に見る長き平和の時代を送つて、専ら自家の世職に勵み、變化なき所に變化を求め、商略商術の道

に精倒していつた此時代の商人が、全き讚嘆に價しないとはいへ、商人としての根深き性格を彼自らのものとしたことを思ふべきである。吾々は青陵の著書に就き、大阪商人の過去の姿を其上に尋ねて、日本商人の封建的性格と其中に築かる、商人としての一つの完結せるタイプに時代の反映像を見出すべきであらう。

註① 編者の自序「夫れ貨財は民生の大本にして天下一日も之れなくんばあるへからず故に貨財の消長は實に國家の盛衰汚隆に關す、見よ今や歐米諸國が宇宙を睥睨して天下に雄飛するもの亦皆貨財の力に依らざるはなし。殊に今日では是れ富豪の戰國時代にして富む者は人を制し否らざるものは人に制せらる。此に由て之を觀れば徒らに政治に狂奔し論壇に馳驅して貨殖の道を講させらるか如きは策の得たる者にあらざるなり。然とも貨殖を賤しむの風習其臍髓に浸淫したる我國民を率ひて遂に此活戰場に臨まんとする抑も亦難ひ哉。余嘗て茲に感あり、乃ち當世實業家にして其經歷世の模範となるべき者を選んで一書を編成し以て商工徒弟立志修身の龜鑑となし以て斯道を發達せしめんと欲し 下略。

- ② 升小談、日本經濟大典 第二七卷 三五五頁
- ③ 若松常齡「宇藩經濟辨」(日本經濟大典 第四六卷 四九三頁)
- ④ 安井息軒「睡餘漫筆」(日本儒林叢書 隨筆部第二) 二二頁
- ⑤ 廣瀬淡窓「迂言」(日本經濟大典 第四五卷 七六頁)

- ⑥ 稽古談（日本經濟大典 第二七卷 三五四頁）
- ⑦ 十歳より澗水に從ひ二十三歳澗水死歿迄之に師事す。青陵は二十歳頃よりしきりに文章を書き、二十二歳江戸日本橋に學寮を開く。
- ⑧ 稽古談（日本經濟大典 第二七卷 二〇〇頁）
- ⑨ 當時の所謂儒者の地位は、「今の世は儒者いづかたにても政にたつさばらず、唯よめにくき字をよむまでの役なり、江戸にては御儒者は、論語の講釋書にてくるりく論語ばかり講じて濟むなり、評定所儒者と云は、誓詞のあとの梵天帝釋をよむまでの役なり。」（日本經濟大典 第二七卷 二二一頁稽古談）と青陵の言ふに知られる。かゝる儒者たることを仁齋は斥けたのであり、青陵も亦さうである。
- ⑩ 「鶴は不才ゆへに、唯字をぎらく」と動して見て、根本を探りつめれば合點ゆかず、懶惰ゆへ一字か二字を一日も二日も、字に穴のあくほど見て居るなり。」富貴談（日本經濟大典 第二七卷 五六〇頁）
- ⑪ 富貴談（同右 五五七頁）
- ⑫ 久須美祐尚「浪花の風」（溫知叢書 第七編三頁）
- ⑬ 稽古談卷五（日本經濟大典 第二七卷 三二八頁）
- ⑭ 草間伊助筆記卷四（大阪市史 第五 九〇一頁）
- ⑮ 右 卷五（同 右 九二九頁）
- ⑯ 廣瀬淡窓「迂言」（日本經濟大典 第四五卷 九六頁）
- ⑰ 司馬江漢「春波樓筆記」（日本隨筆大成 第一期卷一四〇五頁）
- ⑱ 養心談（日本經濟大典 第二七卷 一一七頁）
- ⑲ 稽古談卷五（同右 三二八頁）
- ⑳ 同 右（同右 三五二頁）
- ㉑ 海保儀平書（同右 六八一頁）
- ㉒ 海保儀平書 或問（同右 七二三頁）
- ㉓ 網目駁談（青陵遺集所收）二〇八頁
- ㉔ 天王 談（日本經濟大典 第二七卷 三四頁）
- ㉕ 稽古談卷二（同 右 二二八頁）
- ㉖ 網目駁談（青陵遺集所收）二二一頁—二二二頁
- ㉗ 同 右 二二二頁
- ㉘ 同 右 二二二頁
- ㉙ 升小 談（日本經濟大典 第二七卷 三七四頁—三七五頁）
- ㉚ 洪 範 談（同 右 三九一頁）
- ㉛ 萬 屋 談（同 右 七三頁）
- ㉜ 稽古談卷四（同 右 三一二頁）
- ㉝ 同 右（同 右 二八八頁）
- ㉞ 稽古談卷五（同 右 三二八頁）
- ㉟ 善 中 談（同 右 一三三頁）
- ㊱ 稽古談卷二（同 右 二〇一頁）
- ㊲ 荻生徂徠「政談」卷二（日本經濟大典 第九卷 九二頁）
- ㊳ 稽古談卷二（日本經濟大典 第二七卷 二二三頁）
- ㊴ 善 中 談（同 右 一二頁）
- ㊵ 稽古談卷一（同 右 一八六頁）
- ㊶ 海保儀平書 或問（同 右 六九五頁）

- ④③ 稽古談卷二(同) 右 二二四頁
- ④④ 熊澤蕃山「集義外書」卷一(日本陽明學中卷一) 二二頁
- ④⑤ 善中談(日本經濟大典 第二七卷) 二七頁
- ④⑥ 稽古談卷四(同) 右 二八七頁
- ④⑦ 稽古談卷二(同) 右 二二二頁
- ④⑧ 稽古談卷一(同) 右 一九一頁—一九二頁
- ④⑨ 同 右(同) 二一五頁
- ④⑩ 天王談(同) 右 五四頁
- ⑤① 大江季彦「經濟新論」(日本經濟大典 第四六卷) 一四五頁
- ⑤② 論民談(日本經濟大典 第二七卷) 一六七頁
- ⑤③ 廣瀬旭莊「九桂草堂隨筆」(日本儒林叢書 隨筆部第二 一七四頁)
- ⑤④ 稽古談卷三(日本經濟大典 第二七卷) 二六三頁
- ⑤⑤ 升小談(同) 右 三六〇頁—三六一頁
- ⑤⑥ 論民談(同) 右 一七九頁
- ⑤⑦ 升小談(同) 右 三六一頁
- ⑤⑧ 綱目駁談(青陵遺集所收) 二二〇頁
- ⑤⑨ 稽古談卷二(日本經濟大典 第二七卷) 二二九頁
- ⑥① 稽古談卷三(同) 右 二六三頁
- ⑥② 柳澤里恭「雲萍雜志」(日本隨筆大成 第一期卷二) 六八五頁
- ⑥③ 升小談(日本經濟大典 第二七卷) 三六二頁
- ⑥④ 太田南畝「假名世説」(日本隨筆大成 第二期卷) 六九六頁
- ⑥⑤ 富貴談(日本經濟大典 第二七卷) 五六八頁
- ⑥⑥ 同 右
- ⑥⑦ 論民談(同) 右 一七七頁—一七八頁
- ⑥⑧ 同 右(同) 一七八頁
- ⑥⑨ 同 右(同) 一六七頁—一六八頁
- ⑦① 同 右(同) 一六八頁—一六九頁
- ⑦② 同 右(同) 六六頁
- ⑦③ 同 右(同) 一七〇頁
- ⑦④ 稽古談卷一(同) 右 二二〇頁
- ⑦⑤ 稽古談卷二(同) 右 二二二頁—二二三頁
- ⑦⑥ 三井高房「町人考見録」(日本經濟大典 第二二卷) 七三頁
- ⑦⑦ 稽古談卷三(日本經濟大典 第二七卷) 二五九頁
- ⑦⑧ 同 右(同) 二五八頁
- ⑦⑨ 升小談(同) 右 三五九頁
- ⑦⑩ 稽古談卷三(同) 右 二五八頁—二五九頁
- ⑧① 升小談(同) 右 三五八頁
- ⑧② 稽古談卷三(同) 右 二五五頁
- ⑧③ 綱目駁談(青陵遺集所收) 二二二頁
- ⑧④ 升小談(日本經濟大典 第二七卷) 三七二頁—三七三頁
- ⑧⑤ 小川五郎氏「海保青陵の遺著について」(經濟史研究 第十 四卷 第五號所收) 參照
- ⑧⑥ 石田誠太郎氏「大阪人物誌」卷一 六三頁
- ⑧⑦ 升小談(日本經濟大典 第二七卷) 三七七頁—三七八頁
- ⑧⑧ 坪谷善四郎「日本の商人諸君に告ぐ」(日本之商人 第二號 九頁—十頁)